

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

第 25 回 全国大会プログラム

日 時: 2025 年 11 月 8 日(土)10:00~20:00

場 所: 名古屋学院大学 名古屋キャンパスしろとり 翼館

(対面形式のみの開催となります)

★受付 9:30 より

★研究発表 (10:00~11:35)

第一室 翼館 303 教室

司会 小野寺玲子 (横浜美術大学)

研究発表 1 :

Beyond the Favoured Daughter: Mary Hunt Millais' Contribution to Millais' Artistic Career

浅野菜緒子 (Pace Gallery Japan G.K. レジストラー・学習院大学 (非))

研究発表 2 :

ヴィクトリア朝絵画における J. E. ハリソンの影響——J. W. ウォーターハウスの絵画分析を中心に

若名咲香 (盛岡大学)

第二室 翼館 304 教室

研究発表 1 : 司会 田中裕介 (青山学院大学)

Haunted by the Heel: Tragedy, Obsession, and Autobiographical Desire in Swinburne's *Atalanta in Calydon*

Lilith AYVAZYAN (慶應義塾大学 (非))

研究発表 2 : 司会 木村正子 (岐阜県立看護大学)

狂気と幽霊のはざまで——マーガレット・オリファント “The Library Window” の語り手について

大日向悠河 (京都大学 (院))

★シンポジウム (13:00~15:25) 翼館 302 教室

文化の移植——越境と変容

司会・報告 栗野修司 (元佛教大学教授)

報告 石戸信也 (兵庫県立尼崎高等学校講師・元県立博物館員)

唐戸信嘉 (白鷗大学)

島貫悟 (明治大学研究・知財戦略機構研究推進員)

★特別講演（15:40～16:55）翼館 302 教室

移築と文化の移植——ラフカディオ・ハーンの日本居住をめぐって

司会：大石和欣（東京大学）

中川 武（博物館明治村館長）

★総会（17:10～17:30）翼館 302 教室

司会：石川大智（慶應義塾大学）

★懇親会（18:00～20:00）しろとりキャンパス曙館 2 階食堂

【研究発表】

第一室 翼館 303 教室

研究発表 1：

Beyond the Favoured Daughter: Mary Hunt Millais' Contribution to Millais' Artistic Career

浅野菜緒子（Pace Gallery Japan G.K.レジストラ・学習院大学（非））

Mary Hunt Millais (1860–1944), the fourth child of John Everett Millais (1829–96), played a sustained and integral role in the artist's professional life—one that has been largely overlooked in scholarship. Her contributions ranged from modelling for key works, to managing correspondence, sourcing props, coordinating between households, and later preserving the family archive. Remaining unmarried and living with her father until his death, Mary provided continuous logistical, emotional, and intellectual support that materially shaped the conditions of his late-career production.

This paper demonstrates that Mary's work extended far beyond familial duty, constituting a form of behind-the-scenes collaboration that influenced both Millais' working environment and creative output. Drawing on the largely underexamined repository of family letters and documents from Sir Geoffroy Richard Everett Millais Collection (Tate Archive), it analyses how her activities functioned as an enabling infrastructure for his artistic practice. In re-evaluating her agency and contributions—set against the more documented roles of Effie Millais and John Guille Millais—this study reframes Mary not as a peripheral family member, but as a formative figure in sustaining Millais' career, and a representative example of often-overshadowed women who supported Victorian artists.

研究発表 2：

ヴィクトリア朝絵画における J. E. ハリソンの影響——J. W. ウォーターハウスの絵画分析を中心に

若名咲香（盛岡大学）

19 世紀後半の女性歴史学者 J. E. ハリソンは、古代ギリシアの祭儀や神話を研究し、多数の著作を残した。本発表では、従来のハリソン研究を発展させ、ハリソンの業績が歴史学の領域に留まらずヴィクトリア朝美術にも影響力を持ったことを、作品制作時にハリソンを参照したと考えられる J. W. ウォーターハウスなどの絵画の分析を通じて明らかにしたい。そのために、まず、ハリソンとその業績について主要著書をふまえて概観しつつ、19 世紀後半の美術雑誌を参照しながらハリソンとヴィクトリア朝絵画の接点について指摘する。さらに、ウォーターハウスの《ユリシーズとセイレンたち》や《ダナエ》などの諸作品にハリソンの著書を参照した

痕跡が認められることを、図像分析やハリソンの著書との照合によって明らかにする。これらを総括し、ハリソンがヴィクトリア朝美術に及ぼした影響の意義を考察する。

第二室 翼館 304 教室

研究発表 1：

Haunted by the Heel: Tragedy, Obsession, and Autobiographical Desire in Swinburne's *Atalanta in Calydon*

Lilith AYVAZYAN (慶應義塾大学 (非))

This paper argues that Algernon Charles Swinburne's *Atalanta in Calydon* (1865) offers a radical reimagining of female autonomy in the Victorian period. Atalanta's refusal of love, marriage and motherhood opposes the normative ideals of the age, and Swinburne presents her self-chosen isolation as liberation rather than loss. This reading challenges the moralised interpretations of the play in its own time, which sought to contain Atalanta's resistance within conservative frameworks. Through close textual and contextual analysis, the paper shows how her voice, emotional discipline, and rejection of prescribed roles anticipate the more overtly transgressive heroines of *Poems and Ballads* (1866)—figures like Dolores and Faustine, who revel in sexual power, cruelty, or sacrilege—while Atalanta embodies a quieter form of resistance. The paper also examines autobiographical currents, particularly Swinburne's unreciprocated love for his cousin Mary Gordon, manifesting in Meleager's masochistic devotion along with the symbolic focus on foot imagery. This reading positions *Atalanta in Calydon* as a hybrid work that fuses classical form and personal grief, allowing Swinburne to explore autonomy, gendered rejection, and sublimated desire.

研究発表 2：

狂気と幽霊のはざま——マーガレット・オリファント “The Library Window” の語り手について

大日向悠河 (京都大学 (院))

Margaret Oliphant (1828–97) はスコットランド出身の女性作家であり、*The Chronicles of Carlingford* (1861–76) や *Hester* (1883) などの家庭リアリズム小説はジェンダー批評の文脈で近年注目されている。*Blackwood's Edinburgh Magazine* で作品や批評を数多く著してきた彼女であるが、1879年の *A Beleaguered City* を皮切りに一群の幽霊小説を著すようになる。“Stories of the Seen and Unseen”と称されたこの作品群には、生者や死者をとりまく様々な問題に対するオリファントの関心が克明に表れている。今回は、最晩年の幽霊小説である“The Library Window” (1896) を扱う。この作品では、図書館の窓に垣間見える幽霊の姿に徐々に取り憑かれてゆく語り手の意識が、一人称で強迫的に綴られてゆく。本発表では、影響元や同時代の諸作品も念頭に置きつつ、窓という空間的モチーフおよび狂気と結びついた女性という二項を中心に分析する。オリファントは幽霊との邂逅に様々な意味を持たせているが、特に女性・狂気という19世紀的な問題のなかでそれがどのような意味を持つのかを考察したい。

文化の移植——越境と変容

司会・報告 栗野修司（元佛教大学教授）

レイモンド・ウィリアムズが『文化と社会』（1958）と『長い革命』（1961）で「文化」に再定義を与えている。マシュー・アーノルドの静的で規範的で普遍的な文化に対して、ウィリアムズの指し示す文化は動的で多面的（多様）なものだ。それは何よりも日常的慣習、価値観、信念、人と人との交わりなど社会生活の総体である。そういう文化が時間や空間を飛び越え、「移植」されたのがヴィクトリア朝期であった。本シンポジウムではウィリアムズの定義する「民衆文化」を共通項として、3 人のパネリストが報告する。多（他）文化共生がこれまで以上に強く意識される現在、帝国、規範、中心のカウンター/変容としてのゴシック、民藝運動、極東のヴィクトリア朝文化を読み解くことは意義のあることだと思われる。

近代神戸の都市文化を支えたヴィクトリア朝文化

報告 石戸信也（兵庫県立尼崎高等学校講師・元県立博物館員）

ヴィクトリア朝文化の残り香は大英帝国諸地域のみならず、極東の明治・大正の神戸にもそれを見い出すことができる。126 区画の神戸外国人居留地は横浜より狭く外国人数も横浜の約半数だったが、在留欧米人中の英国人の比率はむしろ神戸の方が高い。外国人墓地の埋葬者数も英国人が最多で、1868 年開港の神戸ではヴィクトリア朝文化の影響が大きい。港湾や灯台、都市計画、水利土木施設、鉄道敷設や橋梁、洋風建築、スポーツや登山文化、ホテル文化、洋服、食生活、教育、新聞メディア、海員福祉、文学、洋館のタイルや教会の英国製煉瓦まで港都の市民生活にどのようなヴィクトリア朝文化の受容と影響、変容と発展があったのか、アーカイブ諸資料と現地調査からそれを浮かび上がらせ、単なる舶来文化でなく、都市生活文化形成の核として考えてみたい。

ゴシック小説におけるカトリック文化復興の戦略

報告 唐戸信嘉（白鷗大学）

18 世紀末に興隆したゴシック小説は、表面的にはイギリス体制に順応する外観を保ちながら、プロテスタンティズムおよび合理的科学主義に対する批判を展開していた。本発表では、シェリー『フランケンシュタイン』における科学万能主義への警告から、ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』におけるプロテスタント的価値観の解体、コレリ『テルマ』のカトリック憧憬、ストーカー『ドラキュラ』におけるカトリック的世界観の回帰まで、ゴシック小説の展開を検討する。これらの作品は、カトリック的怪物や超自然現象のイメージを通じてカトリック的価値観を召喚し、プロテスタント文化の限界を露呈させる戦略を採用していた。こうした戦略により、巧妙にカトリック文化をイギリスに再移植することがゴシック小説群のひとつの役割であった事実を明らかにしたい。

柳宗悦におけるラスキン美学の受容と民藝理論の構築について

報告 島貫悟（明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）

本報告では、ジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819–1900）の著した『ヴェネツィアの石』（*The Stones of Venice*, 1851–53）の内容が、柳宗悦（1889–1961）の思想形成にいかなる影響を与えたのかを再検証することを通じて、アーツ・アンド・クラフツ運動と民藝運動の間の影響・受容関係を再考する。まず柳がラスキンの思想をウィリアム・モリス（William Morris, 1834–1896）とは異なる仕方を選択的に受容したことを示した上で、柳はラスキンから学んだ考えを、自身の美学やその背後にある宗教観・自然観といかに結合していったのかを明らかにする。そうした分析を通じて、民藝運動とアーツ・アンド・クラフツ運動の関係は、影響の有無という単純な二項対立に還元されるべきものではなく、むしろ互いの思想ならびに実践の諸相を具体的に比較することで、その異同をより精緻に捉える必要があることを示したい。

【特別講演】翼館 302 教室

司会：大石和欣（東京大学）

移築と文化の移植——ラフカディオ・ハーンの日本居住をめぐって

中川 武（博物館明治村館長）

ラフカディオ・ハーンは自らのアイルランドの出自を誇りにしていたという。彼は、周知のように、さまざまな場所で育ち、仕事をし、漂泊、あるいは漂流の詩人、探検家、怪談文学者である一方、松江で日本婦人と結婚し、深く日本の伝統文化に傾倒したことでも知られている。明治村に移築されている沼津の魚商山口乙吉宅に、東京にもどったあとの晩年ほぼ毎年、ハーンは家族と共に過ごしている。ハーンの、それ以前に過ごした、松江、熊本、東京の住まいと生活に比べて、沼津の漁師の家は、何か彼にとって大事なものが違っていたように思い、そのことを考えてみたい。



博物館明治村に移築されたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）避暑の家

★懇親会について：しろとりキャンパス曙館2階食堂にて18時から開催（会費4500円）。

申込方法については別途会員用MLにてご案内いたします。

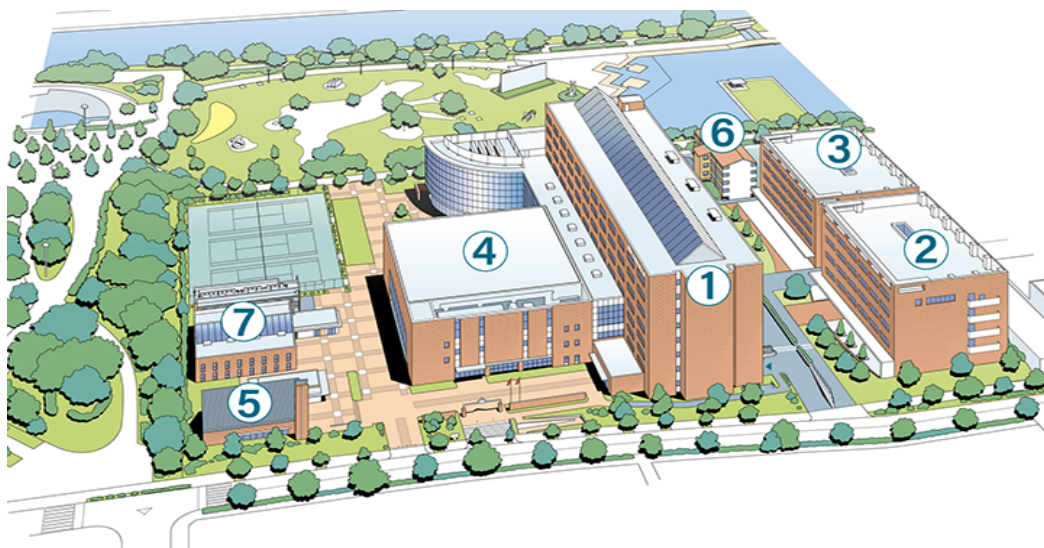
★エクスカーションについて：大会翌日、有志で博物館明治村に見学に行きます。こちらの申込方法についても会員用MLにてご案内いたします。（問い合わせ先：松本靖彦 matsuko@rs.tus.ac.jp）

会場情報

・当日の学生食堂は営業しておりません。しろとり庭園内の茶店も昼食向きではありません。近隣にスーパーやまなか（日比野駅を上がってすぐ）、セブンイレブン（日比野駅からしろとりキャンパスへ行く途中にあります）、ウェルシア（たいほうキャンパス裏。弁当類少々。）などがご利用いただけます。また、日比野駅周辺に寿司屋、中華料理店、コメダ珈琲店などもあります。

・懇親会会場へは、曙館警備室前を通り、中央階段から2階に上がってください。エレベーターの利用も可能です。曙館警備室前を通り、左へ折れるとエレベーターがごぞいます。

名古屋キャンパスしろとり



1. 曙館（あけぼのかん） 2. 翼館（つばさかん） 3. 希館（のぞみかん）50周年記念棟 4. 泉館（いずみかん） 5. チャペル 6. 国際セミナーハウス 7. クラブハウス・合宿所「友愛」

交通アクセス

名古屋市営地下鉄名港線「日比野」駅下車

1番出口を出て真っすぐ進み、最初の信号（名古屋国際会議場北）を右へ約500m。

名古屋市営地下鉄名城線「西高蔵」駅下車

2番出口から名古屋国際会議場方面へ進み、橋を渡り最初の信号（名古屋国際会議場北）を左へ約500m。

名古屋駅から地下鉄「日比野」駅まで

・JR名古屋駅→JR金山駅→地下鉄金山駅（名港線）→「日比野」駅

・JR名古屋駅→名鉄金山駅→地下鉄金山駅（名港線）→「日比野」駅

*県内には同名の駅で名古屋鉄道の駅もありますので、お間違えなく。